

信州大学
総合人文社会科学研究科
人間文化学分野
修士論文要旨集

令和4年度(2022年度)版

目次

王龍溪の思想について 呉 易林 WU YILIN (哲学・思想論領域)	1
SDGs の理念受容における青年海外協力隊経験の意義 —ライフスタイルの質的研究を手がかりとして— 小松 誠 (社会学領域)	2
朱子の工夫論について 董 溟 DONG HAO (哲学・思想論領域)	3
Communicative Strategies by Japanese People in ELF Contexts 林 陽生 (英語学領域)	4
反右派運動における「右派」の構築 —1957 年～1961 年中国甘肅省酒泉における夾辺溝右派の証言から— 龍 在恬 LONG ZAITIAN (社会学領域)	5
広東系華人から見た 19 世紀の米清貿易 劉 子渝 LIU ZIYU (東洋史領域)	6

修士学位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 哲学・思想論 学籍番号／Student ID 20UA101F

氏名／Name 呉 易林 WU YILIN

論文等題目／Title

王龍溪の思想について

論文等要旨／Abstract

明代の思想家である王龍溪は、師である王陽明の心学に立脚しつつ、独自の見解を提示している。王龍溪は良知現成を唱えることについて、誰でも当下に良知を持っているという角度から論じている。しかし、人が良知を持っているとしても、そのままそれが発揮されるとは限らない。王龍溪は良知をそのまま発揮するためには、修証の工夫を強調し、誰でも実践する必要があると明言した。彼が友人や学生に「良知」を説明した時には、友人や学生の理解に基づき、より深く理解させるために、適応の工夫を例として示している。本論は、王龍溪の教学文献に基づき、その「幾」と「機」についての言葉を中心として、それが示す意味の歴史を考察し検討することを試みる。

王龍溪の「幾」の思想は、『周易』の「研幾」思想を出発点とし、周敦頤と王陽明の思想に従い、更に『大学』の誠の思想を加えることで、独自の見解を唱えるに至った。また本論では「庶幾」の用例から詳細に意味分析を行い、特に「知幾」「庶幾」「審幾」の組合せは悟得の段階として提唱されていると考える。この段階から外れれば、「忘幾」あるいは「失幾」として表される。一方、王龍溪における「機」の思想は、『莊子』の「機械」「機事」「機心」の思想に基づきつつ、独自の思想を加えることで、「忘機」あるいは「機忘」を主張した。この「忘機」と「忘幾」とは意味が異なり、「機」と「幾」の通用例として見做すことはできない。「生機」については、『周易』の「生」の思想を出発点として、王陽明の思想に従い、「生機」という熟語を形成している。王龍溪が「生機」とほぼ同じ意味で「生幾」を使っている例も存在し、これは「機」と「幾」の通用例として見做した。なお、王龍溪は「生機」と「天機」が同じものとし、莊子や邵雍の思想に基づき、「天機」の自然性と根本性を強調している。

結論として、王龍溪の文献では、場合によっては「幾」と「機」を通用するものもあるが、主に、「幾＝『周易』の聖人である境界」と「機＝機械から、働きへ進み、運転変化の自然性と根本性」の意味に従い、自らの見解を唱えていたと考えるものである。

修士学位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 社会学 学籍番号／Student ID 21UA101K

氏名／Name 小松 誠

論文等題目／Title

SDGs の理念受容における青年海外協力隊経験の意義

—ライフスタイルの質的研究を手がかりとして—

論文等要旨／Abstract

本研究は、持続可能な開発目標（SDGs）に取り組んでいるように見えて、本質と実態が伴っていない活動が行われていたりする「SDGs ウォッシュ」と呼ばれる現象があることから SDGs を「自分事」として捉える意識変容の方策として「経験」に着目し、SDGs のゴールに向けた本質的な経験が内面化し、経験を資本として実践をしていると想定される青年海外協力隊経験者に注目した。そして、本研究を貫く問いとして、「青年海外経験者は開発途上国で活動や生活をする中で、SDGs の本質に沿う経験を得たのか、そして任務後、その経験をどのように社会還元につなげているのか」と設定し、彼らの実践から示唆を得ることを目的とした。

研究方法は、筆者が行った青年海外協力隊経験者へのインタビュー調査や JICA から出されている機関情報誌から得られた言葉を質的研究を中心に分析を行った。

その結果、青年海外協力隊経験により培われた知識、技能を資本として多分野において社会還元が実践されていることが明らかになった。また、途上国と地域づくりの課題には類似点があり、協力隊経験を資本として、地域づくりのために活かす場が日本社会にあることが明らかになった。また、任務後の自己変容や社会還元への実践に繋がる「協力隊経験」に注目すると、途上国で形成されるアイデンティティや、経験に意味づけがされることが実践へ繋がる資本に転化されることが分かった。また、協力隊経験と職業選択との関わりにおいて、仕事の選択肢が広がりを見せたり、経験に意味づけがされたりすることで職業移転を行っている経験者が多い一方、高まりをみせた専門性を復職後の仕事に活かす経験者もいることが明らかになった。

以上のように青年海外協力隊経験が意味づけされ、社会還元を行う資本に転化し、日本社会で実践している経験者がいることから、「青年海外協力隊経験者が、開発途上国の2年間で形成されたアイデンティティや、経験に意味づけがされ資本に転化したものを基に個々の方法で SDGs の本質に基づいた社会還元や持続的な社会づくりに活かす行為へと繋げている」と言え、それらは SDGs の本質に基づいた実践に向けて示唆を得られるものであると結論づけた。

さらに青年海外協力隊は開発途上国で「自分の活かせる知識、技術、経験を生かせる」とはいえ、異質な環境で活動や生活をするリスク、任務後のキャリアが保証されているものではないリスクが隊員にありながら、発足して 60 年近くの間、累積 46,000 人を超える者を協力隊に参加させ、現在も継続し得ているのだろうかという問いに対し、自己実現や自己変容を望む若者が、協力隊経験者の生き方を知ったり、個人化された経験を聞いたりすることや、JICA や OB・OG 会が行う参加者獲得事業から刺激を得ることによって次の青年海外協力隊へと駆り立てられる青年海外協力隊が青年海外協力隊を再生産するサイクルが確立していることを明らかにした。

修士学位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 哲学・思想論 学籍番号／Student ID 21UA102H

氏名／Name 董 溟 DONG HAO

論文等題目／Title

朱子の工夫論について

論文等要旨／Abstract

朱熹の思想を研究しようとするならば、朱熹の工夫論は避けられないテーマである。なぜならば、まだ聖人に至っていない儒者にとって、工夫（自己修養）とは聖人の境地に到達するために必要なものであり、朱子として例外ではない。実は朱子自身の工夫体系の確立には格闘期間があり、それは定論の確立（40歳時点）とともに樹立したと見られる。40歳以前の朱子は別の工夫に傾倒したこともあるが、それ以後は大きな変化がない。しかし特に中国において、朱子の思想形成に関する従来の考察の多くは、時間軸と朱子の生涯の流れに即して、本体論（「心は性と情を統ぶ」という心性論）に偏って研究されてきた、朱熹の工夫論を検討対象とする先行研究はあまり多くなく、またあまりに都合よくその工夫論を討論するものまで存在する。実のところ朱子の工夫論が彼の思想転換に大切な役割を演じており、朱子自身とても工夫を重視している。

そのため筆者は朱子の工夫論を研究する必要があると考えた。筆者が目指すのは、中国語と日本語二つの言語圏の研究業績に基づいて、また朱子の二度にわたる思想変化の過程を踏まえて、工夫方法を軸として、可能な限り朱子の工夫体系の転換歷程及び動機を明らかにすることである。本論では彼の思想転換点（40歳）を境にして、前半と後半二つに分けて論述をする。前半では、思想の変革が確立される前、朱熹が師の工夫（未発における体認）と友人である張南軒の工夫論（察識端倪）に傾倒したときに遭遇したさまざまな問題と苦悩を紹介する。簡単にまとめれば、師の工夫には静に流れる問題があり、友人張南軒の工夫には動に流れる問題があるということである。後半では、朱熹が学んださまざまな工夫論を互いに揚棄し活用する歷程及び最終的に定説の工夫論を確立した歷程及び理由を紹介する。定説以後朱子は苦悩を一掃して新たな体系を確立した。それは一言で言えば格物及び敬に尽きるということである。朱子は自ら格物の工夫と敬の工夫を尽くせば、聖人の境地に到達できると想定した。

修士學位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 英語学 学籍番号／Student ID 21UA103F

氏名／Name 林 陽生

論文等題目／Title

Communicative Strategies by Japanese People in
ELF Contexts

論文等要旨／Abstract

The study of World Englishes, which has been developing since the 1980s, has recently reached its theoretical limits. Instead, the concept of English as a Lingua Franca has emerged. This study first reviews the history of a series of studies on this major topic in sociolinguistics. Then it summarizes the definition of ELF and previous studies on the characteristics of ELF communication. Next, this study analyzes and discusses the characteristics of ELF communication by Japanese people, together with examples of ELF communication. As a result, it is confirmed that Japanese people use a variety of strategies when using English. Finally, this study suggests that these observed characteristics may be based on a unique Japanese identity.

修士学位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 社会学 学籍番号／Student ID 21UA104D

氏名／Name 龍在恬 LONG ZAITIAN

論文等題目／Title

反右派運動における「右派」の構築

—1957年～1961年中国甘肅省酒泉における夾辺溝右派の証言から—

論文等要旨／Abstract

本研究は、1957年から1961年に起こった中国反右派運動において、統一的な基準がなく曖昧な「右派分子」が、地方でどのような社会システムの下で構築されたのかを探求する。甘肅省酒泉夾辺溝における右派に関する文献および映像作品に基づいて、反右派運動の実態を明らかにすることを旨とするものである。また、地方政府における右派労働改造についての考察を中心課題とする。具体的には、インタビュー集やドキュメント、また甘肅省の地方誌を解読することによって、反右派運動における社会体制について考察を試みる。

反右派運動に関する政治学及び歴史学の分析は、エリート知識人や民主党派の指導者の経験に着目している。一方で李若建(2008)によれば、「右派分子」のレッテルを貼られた知識人の中心はエリート知識人ではなく、特に小中学校の教師が多く、地域的には大多数の「右派分子」は中小都市や農村に集中していたことが明らかになっている。

本研究では、反右派運動における地方右派の証言に基づいて、反右派運動のため都市から労働再教育農場へ移動を強いられ、右派レッテルを貼られた彼らの生活がどのようなものであったかを明らかにする。具体的には、1957年末から1961年初めにかけて、日々の労働秩序がどのように維持されたかを考察し、夾辺溝農場における内部の管理方法と外部の社会体制を分析し、労働再教育農場の内部秩序と外部秩序の側面から、制度的に排除されていた右派を労働再教育農場がどのように国家体制に再包摂していったか、その過程を説明した。分析の結果、このような社会体制の下では、個人が就職などに関する選択の自由を失い、国家に服従することが唯一の選択肢となること、そして国民は主体性を失い、国家の目的を達成するための道具に成り下がってしまう可能性を明らかにした。

反右派運動では、「プロレタリアート VS ブルジョワ」の図式に沿って右派はプロレタリアートの闘争の標的となったが、右派という外集団それ自身が、右派を階級闘争の目標人数として示すノルマなどにより、内部(単位)から構築されたものである。本研究では、こうした「プロレタリアート VS ブルジョワジー」という伝統的な階級闘争が、社会問題の原因であることを説明するうえで有用な図式であることを改めて明らかにし、翻って今日においてもなお注意を喚起する必要性を提示した。

修 士 学 位 論 文 等 要 旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻 分野名／Division 人間文化学分野

領域名／Area 東洋史 学籍番号／Student ID 21UA105B

氏名／Name 劉子渝 LIU ZIYU

論文等題目／Title

広東系華人から見た 19 世紀の米清貿易

論文等要旨／Abstract

19 世紀における華人移民は、1848 年のゴールドラッシュを機に広東地域から北アメリカ西海岸への移動が最初のブームを迎えた。先行研究では、現地社会で自らのエスニック社会を頼りに生き残りを図った人々を軸に検討がなされている。ただし、この方法のみでは、どうして華人がアメリカにやってきたのか、なぜ彼らはアメリカ社会全体に溶け込んでいかなかったのか、華人が来たことで何が変わったのか、そもそもなぜ広東から来たのかなどといった疑問への回答は十分とはいえず、華人の全体像を捉えることは難しいように思われる。このことを踏まえて、本論ではアメリカにやってきた広東系華人を分析対象とし、19 世紀のアメリカ・中国間貿易（米清貿易）、および香港・日本をはじめとするアジア地域と世界貿易の関係が深まるなかで、彼らの大規模移動がどういった役割を担っていたかについて検討する。

本論の構成は以下の通りである。第 1 章では、19 世紀半ば以降に契約華工のカリフォルニア上陸により形成が始まったアメリカ華民社会の構造と、支配層にいた広東系華商の役割を考察する。第 2 章では、大西洋航路によるアメリカ貿易船の広東到着に関する歴史的過程と、19 世紀前半に茶取引を中心とする米清貿易の動向を確認する。第 3 章では、広東系華人の香港・アメリカ移住増加に伴う西海岸の発展、および、香港開港に伴う太平洋航路での米清貿易拡大について考察する。第 4 章では、日本に焦点を当て、在日華人社会の勢力増加や日本の対アジア貿易の拡大について論述する。最後に第 5 章では、米清間での金融業に注目し、広東系華商が営む「金山荘」とアメリカ現地銀行により行われた送金活動について検討を行う。

本稿の目的は、従来のアメリカ社会におけるエスニックの一つとしての中華系の位置づけを検討するというよりも、むしろ、グローバル経済史の視点から、より全面的な華人像を描くことにある。現在の世界経済において大きな位置を占めるアメリカ合衆国・日本・中国を結びつける北太平洋が、どのようにして世界経済のなかに結び付けられていったのかを考えてみたい。

信州大学総合人文社会科学研究科人間文化学分野 修士論文要旨集

令和4年度(2022年度)版

令和 5年 3月 31日 発行

編集者 信州大学総合人文社会科学研究科人間文化学分野

発行者 信州大学総合人文社会科学研究科人間文化学分野

〒390-8621 長野県松本市旭 3 丁目 1 番 1 号

信州大学総合人文社会科学研究科人間文化学分野内
